

第 5 章 （付論） 帝冠様式について

第5章 (付論) 帝冠様式について

近年帝冠様式に関する建築情報が、数多くのホームページに取り上げられている。その理由として、割合に対象となる年代が昭和初期に限定されており、建物そのものもかなりの数が現存していることがある。また近代建築史の定本には、あまり記述されてこなかったこともあるだろう。例えば昭和40年に刊行された「建築用語辞典」(技報堂)に帝冠様式の言葉は載っていない。要するに「様式」と冠して論ずるほど、この言葉自体が人口に膾炙しておらず、言わば建築界の体制内的議論の枠を出ていないからだと思われる。この章では「帝冠様式」と呼称されたプロセスや、神奈川県庁舎の意義について考察してみる。

第1節 語源について

(1) 用語について

戦後、帝冠様式とはっきり呼称して正面から論じたのは建築史家の近江栄(日本大学教授)氏であろう。近江は昭和42年に建築学会関東支部で「近代建築史における設計競技の位置―「帝冠様式」への起因―」と題する論文を発表して、神奈川県庁舎設計コンペを紹介し、これが後の帝冠様式の魁となったとした。また45年9月の建築学会で『帝冠様式』の語源と下田菊太郎について」を発表し、帝冠様式の語源は下田菊太郎が国会議事堂に採用すべきと唱えた帝冠併合式にあったと公表した。しかもこの近江論文に触発されて、下田菊太郎を主人公にした「文明開化の光と闇」¹⁾なるノンフィクション小説が昭和56年に刊行され、帝冠なる言葉が脚光を浴びる。と言っても主に建築の世界の内側においてであるが。近江はこの小説の序文に「仮説・新説そして小説へ」と題して、帝冠様式の語源発見のいきさつや、西山卯三の「建築史ノート」²⁾でファシズムの建築と批判されていることなどを記述している。この間に建築史家達の論文で、近江の諸説を批判したものは見受けられない。近代建築史の世界で、真正面から帝冠様式とはっきり呼称して、論じたのは近江が最初であろう。この論文には小さな錯誤はあるが、それを無視できるほど、衝撃的なものだったのではないか。

錯誤の第一は、西山卯三の「建築史ノート」には帝冠様式という言葉はどこにもないし、いわんやファシズム建築なる言葉もない。まだ昭和23年の段階では日本折衷主義との表現にとどまっている。進歩派の西山ならいかにも言いそうであり、事実昭和31年刊行の「現代の建築」(岩波新書)で「天皇制的ファシズムの建築芸術へのあらわれ」と批判しているのではあるが、やはり同書でも帝冠様式との言葉は使用しておらず、また神奈川県庁舎も引用していない。³⁾誤りの第二は鉄筋コンクリート造の躯体に瓦葺きの屋根を被せる手法の最初が神奈川県庁舎としているが、勿論県庁舎は瓦を葺いていない。

しかしこれまで感情的とも言えるモダニズムサイドからの帝冠スタイル批判がなされている中で、帝冠様式という言葉を定着させ、またその対象建築を近代建築史の中に整理できたのは近江の功績と言ってよいだろう。だからこそ建築大辞典(平成5年、彰国社)に帝冠様式の定義付けが明確にされ、論文の花盛りをもたらしたと思われる。

建築大辞典は「帝冠様式」を次のように説明している。

昭和初期ナショナリズムの台頭を背景として、無国籍または国際的な様式の近代主義建築に対抗して主張された様式。構造は鉄筋コンクリート造または鉄骨造で、これに伝統的な屋根を載せるのを最大の特色とする。日本風および東洋風と称しながら実際には中国風の色彩が強い外観をもつ。一般的にはナショナリズムとファシズムが高揚した1930～40年ごろのもののみを指す。具体的作品としては神奈川県庁（小尾嘉郎、1928）、名古屋市庁舎（平林金吾、1933）、軍人会館（小野武雄、1934）、東京帝室博物館（渡辺仁、1937）などが挙げられる。語源は1918年実施された国会議事堂コンペ入選案を見た下田菊太郎が「意匠変更願」を表明すると共に、自ら帝冠併合式意匠と称する提案を作品図面を添えて発表したのに始まる。その後、和風建築のデザインのポイントとなる屋根を洋風ビルに組み合わせ、新しい様式をつくり出そうとする傾向を総称する名称として用いられるようになった。

この説明が、戦前戦後を通して様々に定義付けられた帝冠様式の今日的なバランスのとれたものと思われる。しかし未だ議論の余地が残されているため、必ずしも確定的な社会的認知を受けているということではない。例えば当然ながら広辞苑にこの言葉は掲載されていない。

第2節 帝冠様式批判の経緯

―戦前―

帝冠様式は戦後の言葉であるが、「帝冠式」との使い方は、下田菊太郎が帝冠併合式を提唱してからすぐにいくつかの評論に現れている。その最初は伊東忠太によるものである。

（1）伊東忠太の批判（大正10年）

下田菊太郎が「帝冠併合式」を請願したのは、大正9年12月から翌年3月までの第44議会であるが、これに直ちに反応したのは伊東忠太であった。伊東は「議院建築の様式に就ついて」⁴⁾との小論で「下田菊太郎君の帝冠式」を奇形の捏造物と評価し、完全否定する。

「クラシック壁体に旧日本屋根を冠する建築は当然狂建築と認められねばならぬ。最も普通和服に中折帽とか、職工服に下駄とか云ふ姿は今日では毫も可笑しくない迄目慣れて来たが、実はそれが略式であるが為め目立たぬのである。格式が正しければ正しい程反照が激しくなり調和が六ヶ敷くなる。今の大礼服と古の冠冕は永久に調和しようとは思われない。」

そして様式構造共に不合理であり、「帝冠式は国辱」とまで述べる。後に自らが審査員として選んだ軍人会館が同様の批判をモダニストから受けることになるのであるが。

（2）雑誌国際建築

第2の帝冠式批判は昭和4年「国際建築」の1月号に、仁和興志なる人物の「国粹カ国際カ」なる漫画戯評が載っている。ここでは単に国粹建築を罵倒する言葉が羅列されている。いくつか抜粋してみよう。

五重ノ塔ガ「オヒス・ビルデング」ニ成ルカ。

オ城ガ百貨店ニ成ルカ、「アパートメントハウス」。

「カミシモ」ガ事務服ニ成ルカ

国粋趣味ハ天上ヘ消エ去ラントシテ居ル

アレ見ヨ！地上ヘ国際時代ガ台頭シテ来タ。

見ヨ、恐ロシク強キ其ノ容貌ヲ！

（３）米田兵三郎と岡村蚊象

第３は、昭和５年６月に米田兵三郎が主宰する名古屋中央建築会が刊行した「名古屋市庁舎競技設計図集」に登載されている当時のモダニスト達の論評である。この中で、岡村蚊象は次のように述べる。

「私は名古屋市庁舎の当選図案を見て、もう一昔前の国会議事堂設計競技当選発表のあった頃のことを思ひ起す。日本の国会議事堂の故に、桝組のついた屋根を載せねばならないと主張し、御丁寧にも帝冠式と称する奇妙な提案迄発表して、その人の子供らしい思ひ付きと、蘆原将軍*的脱線ぶりが当時の物笑ひの種になったことを思ひ出す。さうして、皮肉でなく、１９３０年の今日、天守閣を戴いた図案が真面目に当選してゐるのを考へ合して、帝冠式の持つ予言が、如何に確実性をもってゐるかに驚かされた。」

*蘆原将軍とは明治期から大正、昭和初期まで精神病院に長期入院していた患者で、自ら将軍と思い込んでいた。当時の新聞は何か事件があると面白がって彼の談話を紙面に載せたりしていた。（筆者注）

（４）牧野正巳

そして本格的に論文形式で批判したのは同じ「国際建築」の昭和６年２月号と３月号に載っている牧野正巳による「国粋的建築か国辱的建築か—現代建築世相批判—」であろう。その主張のポイントは要約すると次のようなものだ。

近頃国粋的建築というものが流行しはじめた。西洋の技術をもって日本古来の伝統様式を再現しようとする試みは明治維新以来あった。その後、国会議事堂の設計競技で帝冠式を唱道する者が現れ各方面にパンフレットを配布した。この流行の端緒をなしたのは１９２９年の名古屋市庁舎の設計競技であった。その後日本生命館のコンペでは「東洋趣味ヲ基調トスル現代建築ノ創案ニ努メタルモノハ之ヲ重視ス」と断っている。次の大札記念京都府美術館では「建築様式ハ四囲ノ環境ニ応シ日本趣味ヲ基調トスルコト」、又最近募集された軍人会館では「建築ノ様式ハ随意ナルモ容姿ハ国粋ノ気品ヲ備ヘ莊嚴雄大ノ特色ヲ表現スルコト」となっている。目下募集中の帝室博物館では「日本趣味ヲ基調トスル東洋趣味」に決定された。

国粋主義建築の流行の原因としては

- A、新興建築の力が微弱なこと。日本の新建築運動は大正九年（１９２０年）頃からで、まだ十年しか経過していない。
- B、建築の様式を注文し取捨選択するのは大衆乃至は時代の力ではなく、少数の資本家又は権力者及びその代理人である。この建築はコケ脅し、粉飾盛装した大衆を欺瞞するものだ。偉容堂々たる必要があるが如何にも金がかかったらしく見えることが

大切なのである。そして出来上がったものが国粹的建築であるが、これらはまさに黒羽二重のモーニングに仙台平の縞ズボンだ。

C、次の原因は国際的建築に対する反動である。国粹主義者は国際的ということを毛嫌いし恐怖している。先日新興建築家連盟が神田のカフェブラジルで第一回大会を開いた時慌てて飛んできた所轄警察署の高等係刑事の愚を笑うことはできない。国粹建築を主張し、擁護する人達は頑迷固陋な老人なのだ。

アカデミックな建築がブルジョワ階級の手段であったのに対して、国際的建築は新興階級の味方である。資本主義はその末期的現象として帝国主義的色彩を濃厚にし始めた。この時アカデミズムと国粹主義との結合たる国粹的建築が選ばれたことに不思議はなかった。国粹的建築の技術的・理論的矛盾は次のとおりである。第一には無用な装飾は必要以上の構造強度を要求し経費も倍加する。屋根は無いのが純粹形態であり、完全な耐水材料がある以上は無益な空間を構成する必要はない。屋根のほか斗拱も同じである。第二は近代文明下の現代生活に対して全く適応していないことである。自動車も飛行機も文明の進化とともにその形態を変化させてきたのに、何故建築にのみ古くさいスタイルを戻そうとするのか。国粹的建築の主張者は葬儀自動車の如き建物をもって日本全国を埋めようとしている。

日本建築の遺構のうち我々を誤らせる最大のものは日光廟である。狭隘な敷地での平面計画や五重塔の構造など学ぶべきものはあるものの、外観は駄作と言わざるを得ない。工芸的に作られたこの建築は、将軍の威光が発揮され家光の希望はかなえられたかもしれない。そして国粹的建築の粉本は日光廟の範疇を出ていない。

そもそも「国際建築」こそが日本的伝統（簡素美）と合致しているのだ。元々日本の伝統的建築は構造の表現に忠実であった。装飾は建築における封建的手段であったのだ。簡素な建築は多くの茶室や離宮に示されるように、決して単調・無趣味なものではない。現在の建築主は何故国際建築の持つ良さが分からないのだろうか。

牧野正己は昭和2年に東京帝大建築科を卒業し、コルビジェの事務所で修行している。在学中からの論客で、モダニズム建築を唱道する立場から当時の建築関係誌上で多方面に論評を行っている。後に満州国に渡り、国都建設局に勤め、皮肉にも自ら興亜様式の一つとされる満州国合同法院の設計をしている。これは「満州国の首都計画」（日本経済評論社）に記されているが、著者・越沢明氏は直接牧野氏から聞いたと語られた。牧野の階級闘争史観がモダニズム建築推進論と軌を一にしているのがよく分かる論文である。

アカデミックな建築とは、伊東忠太や佐野利器らがコンペ審査員として選択された建築群を指すのは明らかであるし、それがブルジョア建築であると規定する。そして国際建築（モダニズムを指すのは言うまでもない）こそが新興階級（プロレタリアのことだろう）のものとする。さらに国際建築こそが日本的簡素美と合致していると言い、屋根はフラットスラブが純粹形態だと言っている。日光東照宮を否定し、茶室や離宮を賛美するもの、タウトの考えと同じである。⁵⁾

この論評が書かれた昭和6年初頭は、まさに東京帝室博物館設計コンペ（昭和5年12月～昭和6年4月）の真最中になされている。またこの「国際建築」という雑誌は大正15年に「国際建築時論」という名前で発行され昭和3年に改題されるが、最新西欧建築の

動向を紹介する雑誌として戦後まで長く存続した。また編集者の小山正和は勇気ある編集方針で、左右両派の論文をバランスよく載せてはいるが、明らかに коммуニストの立場で書かれた論文は、今読んでもよく発禁にならなかったものと思わせるものがある。

また国会議事堂建築に異議を唱えた下田菊太郎の「帝冠式」という言葉も冒頭の棒線部分で国粹主義建築論の典型事例として使っている。しかし文意からして、帝冠がこれら国粹主義建築を総称するということではない。

牧野にこの怒りの論文を書かせたのには二つの具体的な要因がある。第一には前年の昭和5年10月に、革新的建築家の組織「新興建築家連盟」が神田のカフェ・ブラジルで設立大会を開催しようとしたところ特高の妨害にあうなどして、わずか2ヶ月で解散を余儀なくされたことがあった。第二には東京帝室博物館設計コンペの募集要項の中に「その様式は内容と調和を保つ必要あるを以て日本趣味を基調とする東洋式とすること」との文言があったことである。

この様式規程は牧野ならずともモダニストの怒りを呼んだ。「日本インターナショナル建築会」は応募拒否の声明を出している。日本インターナショナル建築会は主に関西に在住する本野精吾、上野伊三郎ら六人とワルター・グロピウスやブルーノ・タウトら十人の外国人を会員に昭和2年7月に京都で設立された団体である。その綱領に「様式の建築には伝統的形式に拠る事を排し、狭義の国民性に固執せず、真正なるローカリティに根底を置く」との一文があり、東京帝室博物館コンペの規程は許されざるものだった。しかもその審査員の顔ぶれは、伊東忠太、内田祥三、岸田日出刀、北村耕造、佐藤功一、武田五一、塚本靖、大島義儋、河田烈、黒板勝美、龍精一、荻野伸三郎、細川護立（委員長）となっていた。

伊東忠太と塚本靖は大礼記念京都美術館と軍人会館、内田祥三は神奈川県庁と軍人会館、佐藤功一は神奈川県庁、名古屋市役所と軍人会館、武田五一は名古屋市役所と大礼京都美術館といった具合にそれぞれ設計コンペの審査員を務めている。これら建築家審査員の陣容からは、当然に和洋折衷のものが当選することが予想された。この時点で岸田日出刀にはまだ発言力はなかった。

そして結果は予想通り、渡辺仁の和風瓦屋根を乗せた建築案が一等となった。なおこのコンペで、前川国男が落選覚悟でモダニズムの案で応募し、これも予想通り落選しているのはあまりに有名な話となっている。「国際建築」の昭和6年6月号に前川の有名な落選記「負ければ賊軍」が掲載された。「態みやがれ」で始まるこの一文を読むと、前川の悔しさが伝わってくる。それは巷間伝えられる落選覚悟だったとは到底思えないものだ。この中で、もっと多くのモダニスト達は応募すべきであった、例え結果はだめであったとしても、と訴えている。しかし前川は戦後もし自分の案が採用され実際建築されていたら上野の山は目をあけて歩けないと語っている。戦後もこの時期になると、単調なモダニズムへの反省が起きた頃である。⁶⁾

モダニストの意見はそれとして、渡辺仁の案は時代の雰囲気鮮明に伝えている。渡辺は東京帝室博物館のモチーフは、ジャワの絵はがきから得たようだ。⁷⁾

筆者も前川のプランが上野の山に建設されていたとしたら、実にあじけないものだったろうと思う。前川の作品が横浜紅葉坂に県立音楽堂と青少年会館が建っている。海に近いのにコンクリート打放しを多用し、その塩害等による劣化は著しいものがある。既成権威

に反抗したモダニストも戦後の建築界では、また新たな権威になった。そのため劣化・風化の進むモダニズム建築は戦後建築史の権威となり、容易にその改築ができず、みじめな姿をさらしている。

—戦後—

戦後一体誰が最初に「帝冠様式」なる言葉を使ったのであろうか。筆者は修士論文に帝冠様式を選択した井上章一氏にも問い合わせたことがあるが、一体だれが言い始めたかは分からないと言われた。

近江栄は藏田周忠の「近代建築史」⁸⁾であると言われる。山口廣（日大教授・近代建築史）氏にも確かめられたとのことである。確かにこの本では「興亜調」の説明で「下田菊太郎の言う帝冠式が遂に実現されたかの感がある。日本式の細部でルネサンス式に組立てる新しいビル形式。」として国内では神奈川県庁舎、名古屋市役所、軍人会館、を挙げ、満州国では、新京の忠霊塔、國務総理官邸、國務院庁舎、大同学院、満州国第八庁舎、新京法院合同庁舎を列記している。しかしここでも帝冠様式という言葉は使っていない。

いわゆる通史においてこの名前が出てくるのは昭和33年の神代雄一郎の「日本近代建築史」⁹⁾が最初である。神代は日本近代建築の特殊性の中でアприオリに「帝冠様式（日本のファシズム建築）」と規定し、¹⁰⁾ その事例として伊東忠太設計の靖国神社遊就館と軍人会館をあげている。¹¹⁾

そして「ファシズムの強権発動は日本もドイツも同じであったと思う」と述べる。しかも神代は、ナチスドイツ下でバウハウスのローエやグロピウスらが国外へ亡命したのに、日本では1人の亡命建築家が出なかったことに疑問を呈している。現在でこそ、こうした日本ファシズム論は根拠のないものとして否定されているが、昭和30年代から40年代は、むしろ一般的に流布されていた。

しかし肝心の帝冠様式の建築はなにを指すのかは、論者によってかなり恣意的である。それは今日においても定まっているとはいいがたいのである。しかし、一応今日的な定義を語源とともに系統的に定義づけたのは他ならぬ近江栄である。それは昭和52年の「日本近代建築史再考・虚構の崩壊」（新建築社、村松貞次郎・近江栄他）の中の「日本的独自性の模索・喪失・回復」という近江論文であったと筆者は考えている。実際にこの点を近江氏に尋ねたことがあるが、氏は笑って否定しなかった。

この中で、近江は神奈川県庁、名古屋市役所、日本生命館、大正記念京都美術館、東京帝室博物館を例示している。そして今日では愛知県庁、静岡県庁もその典型として位置づけられている。しかしこれらの建築ははたして「様式」なる言葉が冠されるほどの意味合いを持っていたのだろうか。ちなみに近代建築史の定本を意図したとされる村松貞次郎の「日本近代建築の歴史」¹²⁾には帝冠様式なる言葉は使われていない。

第3節 帝冠様式建築の推進者

—伊東忠太と佐野利器—

江戸時代まで日本に棟梁はいたが、建築家は存在していない。その建築家第一号は辰野金吾である。辰野は師コンドルの薫陶を受け、ひたすらヨーロッパ古典様式の直写的導入

に務めた。明治初期の西欧文明の移入は、西欧列強による中国侵略を教訓にし、また現実
に不平等条約を押しつけられていた明治政府にとって「富国強兵」は至上命題であった。

辰野や長野宇平治らはヨーロッパ古典主義の導入こそが国策にもかなうものとして、自
らも、また弟子たちに教育に務めた。しかし精神の面では愛国的国粋主義者であり、いわ
ゆる「和魂洋才」の体現者となっていた。

明治期の建築家は、官公庁、銀行、学校等にその学んだデザインを現実に変化しえたが、
それはごく一部の存在であり、大半の日本の建築群は日本固有の瓦屋根の町屋づくりに精
を出していたのである。一部の新し物好きの棟梁は唐破風の日本建築に西欧的な塔をくっ
付けたり、ベランダを付けたりした。それが擬洋風建築の出現である。

そして日本は日清・日露の戦役で勝利をおさめ、韓国も日本の属国とした。日本は文化
の分野でも自信を取り戻そうとする動きが顕著となってくる。ヨーロッパでは「ジャポニ
ズム」文化として、芸者・フジヤマ・浮世絵がもてはやされた。法隆寺は再建されていな
い、日本は神国であり、大東亜の盟主であるといった論調はこの時代の国民の気分に乗じ
たものであった。

一方で工業化、産業社会の発展は鉄筋コンクリートを一般化し、佐野利器の登場により、
美学的アプローチが主流であった帝国大学建築学科を工学的な技術者養成機関としての要
素を強めはじめた。その具体的成果が大正4年に東京帝大建築科卒業論文である野田俊彦
による「建築非芸術論」であった。また横浜では遠藤於菟がフリーアーキテクトとして、
塔のないフラットルーフの清楚な建築を作り出し声望を得ていた。

すでに明治末年にはヨーロッパ、特にオーストリアやドイツで勃興していたセセッション
（旧古典様式から脱却して直線や円形などの幾何学的形態の傾向がある）が紹介され、大
正に入ると表現主義（ドイツを中心に展開した近代美術の運動で、生命の表出としての芸
術を主張するが、建築では必ずしも明確なパターンはなくヴォールト状の窓が特徴的であ
る）が流入する。

こうしたいわば近代建築スタイルの勃興期が明治末にじわじわと浸透する中で、日本の
建築界は依然として辰野金吾をトップとする明治の第一期生が牛耳っていた。日清・日露
の戦役の勝利を経て建築にも日本固有の様式を求める社会的背景が醸成されていた。そし
て一期生は帝国議院議事堂のスタイルを見据えながらの危機感を抱き、日本建築の将来展
望に悩み、明治43年5月30日と7月8日の2日間「我國将来の建築様式を如何にすべ
きや」の討論会が開催されたのであった。この討論会については要約すれば三橋四郎の「和
洋折衷主義」、長野宇平治の「西洋直写主義」、関野貞の新様式創造説（伊東忠太の「進化
主義」はそれに含まれる）であるが、まとめに辰野金吾は三つのことを主張した。

第一は、建築様式は自然的になるもので、人為的にはなし得ない。

第二は、将来の様式は洋式と我が国固有式が調和して起こる。

第三は、建築様式は自然的であるが放任することではない。各自が信ずる様式の計画を
公表して様式成立にむけて努力しなければならない。

この第二の説明の中で、辰野は「将来建築様式は洋式を体としてこれに我が国固有の美
術的装飾のある部分を被覆として発展するものと信ずるのであります。」と言い切っている。
日本古来の様式の、接合部や持放し構造のように科学的学理にそぐわないことが多いから、
主要構造部は洋式で、和式で装飾すればよいとの説明もしている。この辰野の結論はやは

り折衷様式の延長線上であり、まさに帝冠様式の考えとつながっている。そしてこれを具現化した建築家が伊東忠太と佐野利器に代表されると考えられる。

（１）伊東忠太

平成１５年４月から８月に渡って、東京青山のワタリウム美術館で「伊東忠太の世界展」が開催され、大変な人気を博した。特に実際に現地見学するバスツアーは、希望者が殺到し、当初三日間の予定が二日間も追加したほどである。筆者も何とか参加できたが、その参加者の大半は、建築にまったく関係しない、普通の家庭婦人だったことにも驚かされた。この企画の成功原因について、美術館オーナーの渡利氏と話しをしたが、まず一般紙が取り上げ「化け物も愛らしく明治の迷宮」といったキャッチコピーもよかったのではと言われた。事実、築地本願寺や震災記念堂などで、カメラは必死に忠太独特の妖怪動物のディテールを追いかけていた。

伊東忠太は法隆寺を世に広めた建築史家であり、「建築」という言葉を「造家」から変更させたのも伊東である。デザイナーとしては、アジアとしての領域、特にインドや中国との視点から様式の折衷を実践した。明治期の建築家が、ひたすらヨーロッパの古典主義を範としたのとまるで違った道を歩んだ。それは鹿鳴館に代表される欧化主義で始まった文明開化が、日清・日露戦争を経て、明治国家が列強入りを目指す段階になると日本的なるものへの回帰、そしてアジアの盟主たれんとする大アジア主義が勃興してきた。岡倉天心や宮崎滔天に始まり、石原莞爾、北一輝へとつながる思想であり、帝国主義や軍部ファシズムと関連づける左翼評論家は多い。この潮流が伊東忠太を建築界の頂点に押し上げたかどうかは分からないが結果論的にはそうである。

伊東の作品は宗教的作品が多い。築地本願寺のような仏教に限らず、靖国神社内の遊就館や、著名人の墓石のデザインを多く手がけている。あえて言えばその作品のほとんどはキツネそのものである。昭和１２年に帝国芸術院会員になり、昭和１８年には文化勲章を受けている。そして公共建築に帝冠様式を選択したコンペ審査員としての顔がある。

それは間違いなく日本を愛したという意味での国粋主義者であり、アジア文化と日本文化の融合一体化を目指した大アジア主義者としての姿が浮かび上がる。しかし軍部ファシズムに屈服した建築家なのか、あるいは本人がファシストだったのかと言えば、まったく否なのである。また作品だけで判断すると伊東忠太はアジア文化にのみ関心を持っていたと思われがちだが、大学の講義では当時最先端のヨーロッパ・セッションの動きをいち早く学生に伝えている。分離派の山田守はその講義に興奮したことを仲間だった大内秀一郎の追悼記に記している。¹³⁾

ワタリウムの「伊東忠太の世界展」で、葉書に漫画を描いたものが数多く展示されていた。その中にはムッソリーニを蛸のように描いて明らかに揶揄したもの（昭和１０年１月２日、怪蛸ムッソリーニ、一身八相を兼務）がある。ヒトラーについても昭和１３年９月３０日に、「ヒトラーの怪腕三巨頭を招致して我意を徹す」と記している。ファシズム自体を批判したものもある。伊東忠太はファシズム建築を唱道したのではなく、ただ自分好みの建築をコンペで選んだだけである。

辰野金吾が議長を務めた明治４３年５月３０日の「我國将来の建築様式を如何にすべきや」の討論で、伊東は次のように自分の建築観を述べている。

「建築の様式即ちスタイルと云ふものは、私の考へでは國民の趣味の反映である一中略一日本古来の様式を基礎とし、之を進化せしめて結局日本の國民趣味を発揮したる石造の公共建築に達し度い。」

伊東忠太は自ら設計した公共建築の作品は残していない。しかし軍人会館にせよ、東京帝室博物館にせよ、伊東の折衷主義建築観からは何の違和感もなく選定されたものだろう。

(2) 佐野利器

次に明治43年の討論会における、佐野利器の発言を再確認してみよう。佐野は第1回目の討論で、三橋四郎、関野貞、長野宇平治、伊東忠太、岡本鑒太郎に続いて6番目に発言している。発言のポイントを要約してみる。

- ① 関野貞の新様式を起すことに賛成する。
- ② 現時の建築は西洋式の直写で、日本趣味と没交渉であり、國民の美的要求を満足させていない。そのため「如何にかしなければならぬ」が問題である。
- ③ 建築美の本義は重量と支持との明確なる力学的表現にすぎない。
- ④ ゴシックは積立構造美を現しているが、昨今のルネッサンスは外部に柱を糊付けして組立構造に見せようとしているものが多い。これは建築美の根本からは不合理である。
- ⑤ 装飾はシンプルな方が、日本人の品位を貴ぶ国民性に合致している。
- ⑥ 國民の様式を得る最良の方法は、日本建築変質様式も一つだが、力学的表現を正直簡明にして突然作り出すことである。セセッションの如きはそれである。

佐野利器は耐震工学の祖として、また建築を美学的対象から工学あるいは科学の対象とした建築界の巨人として評価される。この討論会での佐野の「建築美の本義は重量と支持との明確なる力学的表現」はその根本精神を表したものとしてよく引用される言葉である。しかしその後の帝冠様式と呼ばれる建築に深く関与したことを考えれば、すでにこの討論会の冒頭で、明確に日本趣味・日本人の美的要求を満足させるには「如何にかしなければならぬ」と発言している部分に佐野のデザイナーとしての責任感が見えるのではないだろうか。野田俊彦は「建築非芸術論」を卒論として出したため佐野に睨まれており、「佐野さんは芸術論だったのかな」と下元連は回想の中で語っている。¹⁴⁾

佐野利器は明治13年4月11日、山形県西置賜軍荒砥町で山口三郎兵衛の四男として生まれ、米沢中学生の時天童藩士佐野家の養子となり、名前も利器とした。後漢書の「盤根錯節に遇わずんば何を以て利器を別かたんや」からとったものだという。明治33年9月に東京帝大工科大学建築学科に入学する。同期生に佐藤功一、大熊喜邦、北村耕造、田辺淳吉、松井清足、堀内智三郎、渡辺浚郎がいた。明治36年に卒業し、母校で教鞭をとる。明治38年7月の日露戦争末期に伊東忠太を団長として大熊や大江新太郎と共に満州視察をおこなっている。明治44年にドイツに留学、大正3年に帰国し、この年「家屋耐震構造論」で学位を取得する。元来佐野利器はデザイナー志向型の建築家ではないが、だからと言ってデザインを軽視しているのではない。確かに彼自身回想の中で「自分は入学した時、一中略一建築学には何の科学的理論もない事に失望し、自分に不向きな学科を選んだ事を悔み、やめようかとさえ思った。小さい時から質実剛健というモットーで育てられ、形のよし悪しとか色彩の事等は婦女子のする事で、男子の口にすべき事でないと思

込んでいた位だからだ。」と語っているが、そのデザイン面で果たした役割からすれば責任逃れの方便ではないかとさえ思われる。

何はともかく佐野利器の業績は目がくらむほど、嚇々たるものがある。今日の建築構造計算は佐野利器が確立したもので、佐野震度法と呼ばれている。戦後何回か耐震基準は改正されているが、その基本的考えは同じである。メートル法の採用、ローマ字のヘボン式からから日本式の確立、都市計画、住宅政策、日本大学工学部や東京工業大学の創設、建築教育の枠組みの構築などその影響力は多方面に渡っている。神奈川県庁舎の建設に当たっての顧問を委嘱したことは既述のとおりであるが、静岡県庁、徳島県庁、山梨県庁、学士会館、市政会館の顧問などもしている。

これほどの活躍は裏を返せば、時の権力構造と深く結びついていた、あるいは権力そのものとみなされても仕方ないかもしれない。戦後に長谷川堯も、佐野を構造派の御大として権力側に立ち覇権を握っていたとその著書「神殿か獄舎か」で記述している。¹⁵⁾ 牧野正巳らモダニストらは権力そのものとみなしていたことが先述の論文に表現されている。戦後は国語審議会委員や日本育英会評議員などを務め、昭和31年12月5日鎌倉の自邸で持病だった肺気腫により死亡する。なお長男の啓一は昭和16年東大建築を卒業の後、昭和18年トラック島に出征し、戦死している。

もう少し佐野利器が長生きしていれば、当然文化勲章は受章していただろう。しかし軍部への協力姿勢は存命中はマイナス材料になっていたのかもしれない。東京帝大の総長として学徒動員を演出した内田祥三が文化勲章を受章した時は戦後27年経過していた。

佐野の意思は強固であり、佐野鉄の仇名があった。¹⁶⁾ この討論会における日本趣味建築の提案は、本稿第2章で示した昭和3年11月1日の神奈川県庁の落成式における佐野自身が行った工事報告で、神奈川県庁舎はまさにその解答であるとの宣言に他ならないと筆者は考えている。

結局伊東忠太も佐野利器も国民趣味を反映した様式が必要であるとの結論は同じである。これはあたかも伊東忠太はダーウィンの進化論、佐野利器はド・フリースの突然変異説に相当するようなものだろう。そして佐野が言う「新しき様式を突然作り出す」手法とはコンペであったと思われる。大正12年に佐野は長野宇平治が、設計コンペの一等当選者は実施設計も担当させるべきであるとの要求に反論し、「建築設計図案懸賞競技は案の競技で、図案は建物への興味、時、場所によって非常に変化がある。懸賞競技によって名案を全く予期せざる人から得る所以は此処にある。一般懸賞設計競技の目的は正に之でなければならぬ。」¹⁷⁾ と述べ、長野の主張する指名コンペであっても、一般公開コンペであれ、所詮は名案を得るの手段に変わりはないとしている。だからこそ、佐野にとってコンペでの応募は多い方がよく、図面は平面図の内容よりいかにすぐれた「外形」が描かれているかが大切だった。その証拠が神奈川県庁舎の竣工式における工事報告と筆者は考えている。

またこの日の討論会では岡田信一郎も発言し、佐野利器の「ゴシックは積立構造美を現している昨今のルネッサンスは外部に柱を糊付けして組立構造に見せようとしているものが多い。これは建築美の根本からは不合理である。」との言葉に理解できない旨の発言をしており、いかにも柔軟な発想のデザイナーたる立場を明確にしている。佐野は決していい気分で聞いたとは思えないのであるが。

第4節 帝冠様式と呼ばれる建築

(1) 事例

図5－1 京都市美術館（旧大礼記念京都美術館）



昭和3年に昭和天皇が京都御所で即位の礼をしたことを記念して、設計コンペー等の前田健二郎案を基に建設された。

図5－2 東京国立博物館（旧東京皇室博物館）



昭和12年完成、渡邊仁のコンペー等当選案を基に宮内省内匠寮が実施設計し大林組が施工した。藤森照信氏はこのデザインの完成度の高さから帝冠様式に分類すべきではないと主張するが、昭和5年のコンペのいきさつや、昭和初期建築特有の重い雰囲気は帝冠様式の極みであると言えるだろう。

図 5 - 3 尾張徳川美術館



昭和 6 年にコンペを実施し、一等佐野時平案を基に建設、同 9 年に完成した。国の登録文化財になっている。

以上を含め、帝冠様式建築は学者、評論家によって必ずしも一致していないが、大体共通して帝冠様式と呼ばれている建築を整理してみると次表のようになる。

図表 5 - 1

名称	建設年次	設計手法（下段当選者）
神奈川県庁	大正 15 年～昭和 3 年	大正 15 年 公開競技設計 小尾嘉郎
名古屋市役所	昭和 5 年～昭和 8 年	昭和 5 年 公開競技設計 平林金吾
日本生命館（高島屋）	昭和 5 年～昭和 8 年	昭和 5 年 公開競技設計 高橋貞太郎
大礼記念京都美術館	昭和 5 年～昭和 8 年	昭和 5 年 公開競技設計 前田健二郎
軍人会館	昭和 6 年～昭和 9 年	昭和 5 年 公開競技設計 小野武雄
東京帝室博物館	昭和 6 年～昭和 12 年	昭和 5 ～ 6 年 公開競技設計 渡辺仁
尾張徳川美術館	昭和 6 年～昭和 9 年	昭和 6 年 公開競技設計 佐野時平
愛知県庁	昭和 10 年～昭和 13 年	昭和 6 年 数社限定競技（？） 渡辺仁・西村好時
静岡県庁	昭和 11 年～昭和 13 年	昭和 9 年～10 年 公開競技設計 泰井武

この他に挙げるとすると次のものがある。

図5-4 芝区役所 昭和4年竣工 長根助八設計



出典 帝都復興誌第壱巻

この建物はすでに取り壊されていて現存しないが、明らかに五重塔をモチーフにした神奈川県庁型の帝冠様式に該当するだろう。

図5-5 東京都復興記念館 昭和6年竣工 東京震災記念事業協会（顧問・伊東忠太）



この建物は伊東忠太設計による震災記念堂のある東京都横網町公園入り口脇にある。元々は陸軍被服廠で、関東大震災で最大の犠牲者を出したところとして知られている。パラペット部分にのみ瓦を使用しているこの建物が帝冠様式といってよいか微妙であるが、子細に見るとスクラッチタイルの使用や柱のデザイン、窓の外側に付けた防犯用の鉄組は神奈川県庁と共通する印象を受ける。

東京都は近年「平和記念館」建設構想の中で、この建物の大半を取り壊す予定であるが、これに対して建築学会は保存すべきとの要望書を平成9年3月に青島都知事に提出してい

る。この要望書によれば、設計者は萩原孝一（大正10年東京帝大卒）と推定しており、伊東忠太も関与したとしている。確かに正面玄関の柱頭にある獅子（？）状の妖怪動物は忠太好みのものである。

以上は公共建築であるが、民間建築にも明らかに帝冠様式に類した建築が建てられた。現存するものは少ないが、東京浜松町駅前の渡邊ビルはその一つである。大林組の設計施工ということであり、神奈川県庁を施行した直後であることから、あるいはその影響があったかもしれない。

5-6 渡邊ビル 昭和6年竣工 大林組設計施工



浜松町駅のプラットホームからよく見えるものであり、帝冠様式に共通する威圧感はまったく感じられない。それは上部瓦屋根が、あっさりした切妻になっているからだろう。ファサードのタイルは神奈川県庁の塔屋に使われたものに似ており、神奈川県庁を施工した大林組の設計施工であることから、その影響の可能性も考えられる。

以上を総合的に帝冠様式と言われるものを見ると概ね次のタイプに分類される。

- ① 塔だけが和風になっているタイプー神奈川県庁型
神奈川県庁、名古屋市役所、芝区役所、静岡県庁
- ② 屋上の一部に日本風屋根を乗せたタイプー軍人会館型
軍人会館、愛知県庁、
- ③ 最上階をすべて日本風屋根にしたタイプー東京皇室博物館型
大礼記念京都美術館、東京皇室博物館、神奈川県立金沢文庫
徳川美術館、渡邊ビル
- ④ パラペットにだけ瓦を乗せたタイプー震災記念館

次に帝冠様式を論ずる場合、その大きな特徴として大半がコンペによって生み出され、また審査員が共通していることが問題とされる。応募要領における様式規定がどうだったか見てみよう。

図表 5 - 2

建物名称	コンペ審査員	様式規定
神奈川県庁	佐野利器、佐藤功一、岡田信一郎 大熊喜邦、内田祥三、片岡 安、 小柳牧衛	港外の船舶から容易に認識可能の事 (特段の様式規定はない)
名古屋市役所	佐野利器、佐藤功一、鈴木禎次 武田五一、土屋純一、三沢寛一	特になし
日本生命館	伊東忠太、佐藤功一、武田五一、 片岡 安、塚本 靖、板野兼道 飯田直次郎、田中弟稲、弘世勘太郎	容姿ハ落着キアリ、品位アリテ自ラ 大衆ノ心ヲ備フルコトヲ要ス 東洋 趣味ヲ基調トスル現代建築ノ創案ニ 努メタルモノハ之ヲ重視ス
大礼記念 京都美術館	伊東忠太、佐藤功一、岡田信一郎、 片岡 安、武田五一、石井恒升、 太田喜二郎、菊池完爾、清水六兵衛 安川和二	四周の環境に応じ日本趣味を基調と すること
軍人会館	伊東忠太、佐藤功一、大熊喜邦 内田祥三、塚本 靖、内藤太郎 中村達太郎、飯田久恒、稲垣三郎 岡仲次郎、辻村楠造	容姿ハ国粹ノ気品ヲ備ヘ荘厳雄大ノ 特色ヲ表現スルコト
東京帝室博物館	伊東忠太、佐藤功一、内田祥三 武田五一、塚本 靖、北村耕造 岸田日出刀、大島義儕、河田 烈、 黒板勝美、龍 精一、荻野仲三郎 細川護立	建築様式ハ内容ト調和ヲ保ツ必要アルヲ以テ日本趣味ヲ基調トスル東洋式トスルコト
尾張徳川美術館	大江新太郎、渡辺 仁、藤村 朗 大島義儕、山脇春樹	周囲ノ環境ニ調和スベキ事
愛知県庁	佐野利器、土屋純一	一般設計競技ではない
静岡県庁	佐野利器、大熊喜邦、内田祥三 笠原敏郎、中村與資平、足立 収 木村憲七郎	特になし

近江氏の調べによると(「建築設計競技」鹿島出版会、昭和61年12月刊)大正期主要コンペ16回の内、審査委員長を佐野利器が過半の9回務め、委員として伊東忠太が7回、塚本靖が7回、佐藤功一が6回、片岡安が4回、岡田信一郎が4回、内田祥三が4回だと言う。

また余談であるが入選者にも常連がいて前田健二郎、渡辺仁、平林金吾、岡本馨を挙げているが、筆者はさらに大原芳知や相賀兼介を付け加えたい。そして戦後の建築界でこれ

ら建築家達の名前を見ることはできないのである。

この審査員を見ると、佐野利器が官公庁庁舎即ち内務省系列のものに多く、伊藤忠太は陸軍省はじめその他の施設と棲み分けがされていることがわかる。そして両者がともに審査員になることは昭和14年の忠霊塔の競技設計以外ないようだ。

伊東忠太は明治25年に東京帝大を卒業し、佐野利器は36年の卒業で、伊東は佐野の師匠であるが、すでに現実の社会的パワーは同格もしくは佐野の方が上に立っていた。しかし伊東忠太が審査員をして必ずしも帝冠様式が選ばれなかった例がある。それが実際には建築が実現しなかったまぼろしと言われる東京市庁舎設計競技である。

(3) 東京市庁舎設計競技・モダニズムの勝利

このコンペは、昭和9年2月に行われている。場所は中央区月島で現在は晴海トリトン・スクエアである。この地は戦前の東京オリンピックや国際万国博の予定地ともなっていたが、いずれも実施されなかった。東京市長・牛塚虎太郎はこの地に市庁舎を移転することに情熱を燃やし、一等一万円、二等七千円、三等三千円、佳作一席七百五十円、同二席五百円と破格の賞金設定をしている。

このコンペの審査員は伊東忠太、武田五一、中条精一郎、佐藤功一、小野三郎（市技師）である。元来東京市と佐野利器の深い関係から、審査員が伊東忠太となったのは奇異な感じを受けるが、実は佐野はこの月島移転に猛反対をしていた。多摩霊園の設計で有名な井下清は佐野利器の回想記で、佐野の反対に随分と気を使ったことを記している。¹⁸⁾ 佐野自身は回想の中で、当時建築学会会長であり、「市庁舎の位置は中央に求むべきで、月島のような片よった所に求むべきでない」と新聞に発表し、市長からの設計コンペ審査員の推薦依頼を学会としては拒絶したと言っている。しかも学会機関誌への懸賞広告も、当選結果の公表も一切登載を断った。内田祥三と大熊喜邦は佐野に同調して委員就任を断っている。

懸賞競技の要項を見ると、「帝国ノ首都ニシテ且世界屈指ノ大都市ノ庁舎タルニ相応ハシキモノタルコト及帝都市民自治ノ殿堂タルコトヲ適当ニ表徴スルニ足ル内容及外観ヲ有シ而モ複雑多岐ニ亘ル日進ノ市制ヲ円滑、敏捷ニ処理シ得ル機能ヲ十分ニ具備スルモノタルヘシ」として、建築の様式は随意であるとなっていた。入選図案にもはや帝冠様式は姿を消している。

一等一万円	宮地二郎	(渡辺仁建築工務所)
二等七千円	吉川清作	
三等三千円	前川國男	
同	今井猛雄	
佳作一席七百五十円	大澤 浩	(渡辺仁建築工務所)
佳作二席五百円	曾根辰雄	
同	矢部金太郎	
同	千葉一胤	
同	加藤泰造	

図5-7 一等 宮地二郎案



出典 東京都立公文書館

結局時局柄この市庁舎は実現しなかった。しかしついにモダニズムが中央突破に成功したように見える。まず様式規定が取り払われている。しかも一等と佳作一席は帝冠様式を得意にした渡辺仁の事務所員である。

こうした結果をもたらした大きな要因に、主催者側の都市美協会は応募規定の策定にあたり建築家50人にアンケートを実施するなど慎重にことを運んでいることがある。雑誌「建築世界」の昭和6年11月号にその結果が載っているが、笠原敏郎は「国粹風を加味する」といった条件はつけるなどとしている。

また翌7年の同誌1月号には懸賞競技の改革について特集を組み、さらなるアンケート結果を報じている。この中で注目されるのは岸田日出刀が審査は多数決によりなされるべきであるとしていることだ。しかし佐野利器は決してぶれることなく「市庁舎は日本趣味を基調としたものにしたい」としており、また参考ラインプランもつけるべきとしている。実際の審査がどのようなになされたかは分からないが、結果で見ると従来の日本趣味は消えたかに思えた。

そして昭和9年8月に佐野利器を審査委員長とする静岡県庁の設計競技が行われ、ここも様式規定は取り払われたが、結局泰井武の帝冠様式が一等になっている。そしてこれが現実に国内で建設された庁舎建築における帝冠様式最後のものとなった。

昭和11年には2・26事件が起こり日本の軍国主義がさらに加速するが、この年の暮にやっと国会議事堂が完成している。翌12年7月に盧溝橋事件が起こり、泥沼の日中戦争へと進んでいく。昭和12年の11月4日に「鉄鋼工作物築造許可規則」が公布され、鉄を30トン～50トン使用する場合は届け出が、50トン以上使用する場合は許可が必要となり、実質大型建築は禁止された。このいわば建築家の息の根を止める法令に、建築学会は31名の建築家と商工省の担当者（平井富三郎と久保親夫）を呼んで会議を開き30トンと50トンの根拠は何かなど詰問するが、50トンの根拠は概ね180坪程度の鉄筋コンクリートを想定しているといった回答を得るだけで、もう時局はどうにもならなかった。勿論帝冠様式のようなある意味贅沢な建築は建設される余地はなかった。昭和13年、東京帝室博物館コンペで一等当選をした渡辺仁と松本与作の共同設計になる東京日比

谷の第一生命館（戦後GHQ本部が置かれた）が完成しているが、これがいわば建築家最後の活躍の場となった。わずかに満州だけは例外であったが。即ち日本では建築家なぞもはや無用の長物になってしまった。

昭和14年7月には（財）大日本忠霊顕彰会が陸軍省、海軍省、内務省、外務省、厚生省、拓務省の共同所管により設立され、8月に忠霊塔の図案募集がなされた。審査員は伊東忠太、佐野利器、内田祥三、岸田日出刀、小林政一、佐藤功一、正木直彦、柳井平八（陸軍技師）、吉田直（海軍省建築局長）、中村明人（陸軍少将）、伊藤整一（海軍少将）、安藤狂四郎（内務省警保局長）の十二名である。この募集に、あれほどここに名を連ねた建築審査員に批判的だった前川国男をはじめモダニストたる佐藤武夫、堀口捨己、藏田周忠らが応募している。

昭和16年に太平洋戦争が始まり、戦局も進んだ昭和17年9月に「大東亜建設記念営造計画」と翌18年10月「在盤谷日本文化会館」の設計コンペが催された。コンペの趣旨には八紘一宇や国体といった言葉が踊っていた。そしてともに若き丹下健三が神社スタイルで一等当選を果たした。

戦後の建築史家は一様に建築家の戦争協力の事例として説明してきた。例えば宮内康は「現代建築」の中で、「二つのコンペのありかたとそこに見られた建築家の姿勢には、ファシズムの意志とか、ファシズムへの建築家の協力といったものが、はっきりと現れてくるといわねばならない。」と主張している。¹⁹⁾

この他に、戦後丹下健三が設計した広島平和記念館が、実現しなかった大東亜建設記念営造計画と似ていることをもって、丹下の右翼性を非難する論調がある。こうした論調に対して井上章一は「戦時下日本の建築家」の中で、未だ丹下健三が大学院生であり、丹下一人を非難するのは的はずれであり、もはや仕事のない建築界の極めて体制内的な催し物に過ぎなかったと断じているが、筆者も同感である。

（４）帝冠様式の今日的評価

そもそも様式とは何なのか。広辞苑では「芸術作品・建築物などの特徴を総合したもの。特定の時代・流派・作家などの表現上の特徴を示すもの」とある。この定義からすれば、冒頭の建築大辞典の説明のとおり、大正末から昭和初期の軍国主義時代下における和洋折衷建築として様式と呼んでも差し支えないようにも思える。

しかし我々が、ギリシア古典様式、ゴシック様式、ルネサンス様式となにげなく使う様式という言葉の響きは、建築美学上認知された一定の規範性や、さらにいうなら権威に近いニュアンスが付随している。一体これらの様式と帝冠様式が同列になるのだろうか。

様式についての語源については、佐藤道信氏（東京芸術大学助教授）の論文「“内外”“公私”のなかの和と日本」²⁰⁾が詳述している。今日styleの訳語である様式は、近代日本の翻訳造語に大きな役割を担った「哲学字彙」（明治14年）の時点ではmodalityの訳語とされ“形式”（モード）のニュアンスが強かった。そして様式は「様」と「式」の結合による近代の造語であって、「様」は元々才扁で栩（クヌギ）の実が本義であり「かた」を意味した。「式」は儀式・作法の意味で使われたが「ノリ」との属性があり、法制や規範という

意味もここから発した。つまり「様」には“カタ”や“カタチ”のニュアンスが強く、「式」はより理工学的ニュアンスを含む「ノリ」で、この結合でより汎用性のある概念用語であった。さらには「風」「様」「式」を対比するとノリとしての規則性は「式」「様」「風」の順にゆるくなるとしている。

フランク・ロイド・ライトは「建築のために」（濱徳太郎訳）の中で様式について次のように言っている。²¹⁾

「プランに発し、そしてプランについてエレメンタルな重要さをもって建築家のこころの中に孕まれ育くまれるものが様式である。標準化と我々が呼ぶものが基本的法則で、建築に於ける様式とは、この標準化の一たばにほかならない。完成される道程にある間は、それはすばらしく豊饒であるが、一度完成されてしまった様式は、創造的な精神にとっては牢獄となる。無能なる者のたよりどころでしかない。様式は性格の結果である。蛇は様式を持っている。蜂も、そして蝶々も、また路傍の牛糞にたかるのがねむしも。」

ライトはモダニズムの幾何学的で無機質なデザインにあきたらず、自然や生物を規範として空間内における人間心理を配慮した部分と全体が不可分の統合体とする「有機的建築」を唱道した。上記の文はいわばその序に相当するものである。

建築に関する様式の捉え方として、このライトの表現がより現実に近いと思うのである。要するに完成されたあるいはこれ以上発展のない標準化されたデザインの一束ということである。和風の屋根と洋風ビルの安易な合体はとても豊饒なデザインプロセスを経たものとは言い難い。しかも帝冠様式には標準化といったプロセスもなく、バリエーションも多彩と言っていよい。

小尾嘉郎は神奈川県庁舎のデザインで、和と洋のアウフヘーベンを求めていることは明らかである。実際瓦屋根は使っておらず、塔にしてもコンペ応募案のパスをみただけで五重塔がモチーフとは決して分らないはずだ。むしろ仏教建築と分らせるために最頂部に観音様を載せたとも考えられるが、日本の表玄関として、海上からの眺めとして富士山の次に見えるのが観音像というモニュメント効果を狙ったというのが正しいだろう。また軍人会館コンペの佳作入選のコメントでも、鉄筋コンクリートによる直裁的和風への適用について、当時大家である岡田信一郎の歌舞伎座を批判しているのだ。

しかし佐野利器の考えははっきりしていた。神奈川県庁舎に水煙付きの相輪を載せて、五重塔をモデルにしたことを明確化した。そして続く名古屋市役所では塔の屋根に瓦を使用した案を採用する。牧野正己が最初に国粋主義建築批判をした際に、その対象としたのは名古屋市役所以降である。

では一体帝冠式がなぜ帝冠様式に格上げしたのだろうか。それは戦後の進歩派といわれる建築評論家の頭脳構造にあったと思う。冷戦構造下における評論家は、建築に限らず、体制批判と現実の事象の評価を混同しがちである。その大御所が西山卯三であり、西山に追随するエピゴーネン達はアプリアリに帝冠様式という言葉を使い、日本軍部ファシズムに屈服した建築と評価し、いつしか定説化してしまったのである。

帝冠様式を天皇制や軍部ファシズムと関連づける建築評論家は西山卯三をはじめ、神代雄一郎、山本学治、布野修司など戦後の建築論壇をリードしてきた人々である。そしてこれら進歩派の帝冠様式イコール軍部ファシズム論はまるで定説のようにされてきたのであ

る。

しかしこうした定説に異を唱える建築史家も現れる。まず稲垣栄三が、「日本の近代建築—その成立過程」（1959年、日本経済評論社）で戦前の軍部から、建築に関する統制はナチスなどに比べれば比較にならないほど脆弱なものであったと論じた。

次に越沢明（北大教授）は「満州国の首都計画」で、「日本趣味を基調とする東洋式」が軍国主義の産物で戦前昭和期の建築史を帝冠様式に対する国際様式の闘争と敗北の歴史と描く通説に次の二点の疑問を投げかけた。²²⁾

①満州では帝冠様式が内地より大々的に採用され、国際様式の旗手・前川国男も満州や上海で活躍し、この平和共存の説明がつかない。

②帝冠様式と同様の建築様式を中国では戦後も数多く採用している。互いに戦争した戦前日本、国民党、中国共産党に共通の建築様式があるのを説明できない。

そしてこれまでの建築史家は植民地、東アジアからの視点が欠落しており、帝冠様式にせよ、国際様式にせよ、政治体制に”奉仕した”ことに違いはなかったのだとする。そして所詮建築とはクライアントがいてはじめて設計業務が存立するのであって、デザインのみをもってファシズムだ民主主義だと批評するのは評論家の誇大妄想と断じた。手厳しいが筆者も同感である。

また井上章一（国際日本文化研究センター教授）は「戦時下日本の建築家—アート・キッシュ・ジャパネスク—」で克明な傍証を挙げながら、戦前昭和期に当局からのドイツ・ナチスのような造形指導は存在しておらず、帝冠様式の出現は明治期からの古典様式から戦後の国際様式への「様式的ルールの空白期」に瓦屋根への日本的シンパシーが吹き出たごく自然な現象だと論じた。²³⁾ 名古屋大学助教授の西沢泰彦氏も井上氏の考えに共感に示している。戦後第三世代の若手建築史家達は、西山卯三や布野修司らの軍部ファシズム建築論をまったく信用していない。

井上が帝冠様式論を展開するのに最も影響を受けたのは、石田潤一郎氏の著作である。この本のあとがきに記している。石田自身は帝冠様式を次のように述べている。（筆者の要約）²⁴⁾

日本の様式折衷主義は無原則性が徹底している。様式の解体期では様々な様式的細部装飾が断片的・恣意的に採用された強引な建築表現である。その「中心」は伝統性・民族的独自性の表出で、「屋根」と「伝統」が堅固な照応関係を結んでいる。これは全体を統合する関係性をもてないことによって成立した造型であるが、素朴に屋根と伝統を関係づける発想をかかえた逆説的存在である。周りがその建築を国家的な、歴史的シンボルと認めてはじめて成立しうる造型であった。

難解な表現であるが、元々和風の屋根と洋式の本体は全体として統合は無理なのに、民族的独自性表現のため強引に結合されたもので、国家的・歴史的シンボルと認めなければ存在しない造型だと言うことだろうか。この理論は分かりやすく煎じ詰めれば、牧野正巳の批判した「黒羽二重のモーニングに仙台平の縞ズボン」建築との評価に帰着するだろう。

しかし異文化の合体は珍しいことではなく、今日でも日曜画家が県庁舎をさかんに描く様子はどう説明できるのだろうか。

藤森照信氏は「日本の近代建築・下」の中で、また異なる考えを示す。²⁵⁾ 即ち伊東忠太の進化主義と帝冠様式は別の流れであり、特に後者を突然現れた「鬼っ子」と呼んで、「伝統をトゲトゲしいまでに強調する効果があり、ふつうの人にでも国粋性を強く印象付けることができる。その意味ではきわめてイデオロギッシュな表現方法」とし、東京帝室博物館は帝冠様式ではなく、進化主義の本流に分類すべきと述べている。

確かに東京帝室博物館は、そのデザインの洗練度から言えばその他の帝冠様式建築群より高いと思える。しかし藤森の「トゲトゲしい」や「国粋性を強く印象付ける」との表現はかなり恣意的表現である。この意味で藤森の帝冠様式論は、当時の軍国主義や政府からの強制は否定しているが、国粋主義建築であるとの考えは旧モダニストと変わっていない。

また最近、飯島洋一氏は「王の身体都市」という本で、帝冠様式を論じている。そしてこの様式を唱導した伊東忠太について論じ、その異様な作品群を狂気じみたもので天皇制度下の日本人に共通した「憑依」現象として解き明かそうとしている。面白い視点であるが、極論にすぎる。例えば同書で「帝冠様式は、天皇そのものがまさに憑依的存在であり、天皇霊に見られるように、まぎれもなく霊が身体から身体へと移ることで代替りする憑依であるような、「天皇の身体」と深くかかわった憑依的なデザインなのだ。一中略—最初の帝冠様式ともいえる「神奈川県庁舎」の設計競技が昭和初年となった年、天皇の代替りという憑依が起き、大正天皇から昭和天皇へと天皇霊がうつっていった1926年のものであることは、とても偶然の一致とは思えないのである」と述べる。²⁶⁾ 帝冠様式イコール憑依建築と呼ぶのは勝手であるが、神奈川県庁舎が天皇の代替りの憑依だと言われると、小尾嘉郎の素朴な努力を知るにつけとても理解できない。また神奈川県庁舎のコンペの実施は大正15年の4月から6月で、大正天皇が薨去するのはその年の暮れと、憑依現象なぞ起きる道理がない。

ところで、著名な政治学者・猪木正道の本に「軍国日本の興亡・日清戦争から日中戦争へ」（中公新書、1995年）というのがある。中曽根防衛庁長官時代の昭和45年に、京都大学教授から防衛大学校長に転じており、その思想的立場は愛国心を強調する右寄りのものである。この本も昭和天皇擁護の論説が目立ち、それなりに物議をかましたものである。しかし一点だけ筆者は猪木氏の説に共感するところがある。それは戦前、特に昭和初期の軍人、政治家の思考形式と戦後の空想的平和主義を語る民主勢力の思考形式は、主張する内容は逆だが現実に依拠しない空疎なものという意味で全く同じだという点である。

冷戦構造下では右か左かの二元論的思考はそれなりに社会的意味を持っていたかもしれない。そして圧倒的に建築評論の世界では左側に重心が置かれていた時代では、日本人建築家による満州建築を議論することさえはばかれていた。特に西山卯三の評論は、反米愛国闘争路線を歩む日本共産党の焼き直しとさえ感じさせる。こんな時代での帝冠様式議論は国粋主義の建築、軍部ファシズムの建築、そしていつの間にか軍部からの造形統制があったとか、それに屈服した建築家といった論調にエスカレートしていった。

こうしたかつての進歩派の論調の誤りは2点に集約することができる。第一は時間軸の意図的切断であり、第二は中国文化領域の遮断もしくは欠落ということである。まず時間軸についてであるが、昭和初期は日本の中国侵略が本格化した時代である。満蒙は生命線であり、満州事変から満州国建国と突き進んだ時代に、それに照応した様式があったはずである、それが帝冠様式だという単純図式だ。ただ筆者は井上章一氏のいう瓦屋根に対する日本的シンパシーが吹き出た自然な現象と言うのは言い過ぎであると考え。建築家がデザインを考える時、必ずクライアントの気分に配慮する。公共建築のクライアントは国民であり、国家の社会的思潮がその気分に該当する。即ち佐野利器や伊東忠太という建築界のドンが明治43年の討論会における宿題についてコンペを通して解答を選択したのであって、恣意的なものである。

—キッチンと日本趣味—

最近の建築評論の世界でキッチンという言葉がよく見られる。彰国社の「建築大辞典」は「**kitsch** (独) 一般に、いかもの、きわもの、通俗物、悪趣味物などと訳される。古典的な美学では、高度な芸術の対極にあるもの。本来、美学的な統一のある場所に突然大衆的な好みや商業主義的な物を置くことによって得られる効果を指す。」と説明している。

また布野修司は「現代建築・ポストモダニズムを超えて」²⁷⁾の中で、キッチンは芸術の大衆化、俗化の現象で、大衆の欲望に根ざした流行とコマーシャルイズムが支配するとして、その事例をディズニーランドや折衷主義、ガウディで説明している。そしてキッチンを支配しているのはまさに消費社会の神話と構造などであって、デザイナーなどではないと言い切っている。布野の論理に従うと、極論すれば資本主義社会ではデザイナーが存在できないし、芸術家たらんとする建築家などあり得なくなってしまう。

布野の結論は別として、このキッチンの概念は日本の明治維新以来の折衷主義を理解する上で便利な言葉だ。大衆化は悪趣味にまで通じているかどうかは、その対象建築それぞれで判定するしかないが、評価は人とその好みによって分かれるだろう。しかし伊東忠太の建築はキッチンの典型であろう。

帝冠様式は戦前においては日本趣味の建築に包含されていた。そして越沢明や井上章一の帝冠様式論で、今日戦後進歩派のファシズム建築論はほぼ否定されたが、そもそも日本的なる様式は存在していないとの議論が多く見られる。例えば布野修二は前著のなかで「＜和＞とはなにか。＜日本＞とはなにか。＜日本＞を何か固有なものをもつ一つの全体として捉える見方を捨て去ることにおいてのみ、和風をめぐる議論は揚棄されるはず」²⁸⁾と述べている。

また平成16年7月9日に建築会館で「和風の誕生」をテーマとするシンポジウムが開催された。総合司会の波多野純(日本工業大学教授)氏は、我々が「和風」と感じているものは大抵が外部からの精神的刷り込みによるもので、実体はないのではと問題提起された。

あるいはそうかも知れない。しかし文化や芸術といったものを微分的に分解すればそのアイデンティティーは消えてしまうのではないか。明治43年の討論会における佐野利器の発言を見ると、彼は何かかも知った上で国民趣味の新様式の開創をなすべきとしている

ように思えてならない。結局我々は時代の制約の中で建築活動をしており、出来上がったものはもはや物言わぬ物質である。建築史家は語り部であるが、イデオロギーで恣意的な評価をすることはくれぐれもつつしまねばならないだろう。

第5節 旧満州の建築

日本人建築家は旧満州で多くの建築活動をしており、その多くは現役の建築として残っている。しかも外地なるが故にか、日本人による建築としての記号をもっている。

(1) 唐破風

例えば大連にある大連市役所はどうであろうか。大正9年に市制導入により建設されたものであるが、設計は関東都督府営繕課長・松室重光である。玄関は唐破風がつき、柱から斗拱状のものがそれを支えている。名古屋大学の西澤泰彦助教授は、中央の塔は祇園祭の山車をモチーフにしたものと述べる。²⁹⁾とすればこれは神奈川県庁より早い時期に建築された帝冠様式ではないか。

図5-8 大連市役所



大連市役所

この唐破風こそが、戦前までの日本人にとってそのアイデンティティーたる記号であったと言って言いすぎでないだろう。お寺、神社、城郭、学校、官公庁、住宅、銭湯とあらゆる所に使用されている。そして大正期には霊柩車にもつくことになった。

太田博太郎の論文「唐破風に就いて」³⁰⁾によれば、唐破風の現物は鎌倉時代より前には存在しないが、文献では藤原時代には既に存在していたとしている。そしてこの破風がついていることは、格式が極めて高いことを象徴するもので、分類上は和様になるものである。唐破風と入母屋がセットになればさらに豪華な財力と権力を示すものであった。

明治後期になって現れた日本固有文化回帰への流れ、日本趣味の表現としてさらに多用されることになる。

大連の大和ホテルやハルピンの大和ホテルにも、本体がルネサンス様式であれロシアバロック様式であれ、鉄骨で唐破風を模した車寄せがつけられた。それはいわば日本人によるものとの存在証明ではなかったか。まさに伊東忠太の言うところの「国民の趣味の反映」であったのだろう。

左が大連大和ホテル（現大連賓館）、右がハルピン大和ホテル（現龍門大廈貴賓楼）の玄関部で共に鉄骨の唐破風状のものがついている

図5－8 大連賓館



図5－9 龍門大廈貴賓楼



和洋折衷の流れは連綿としてあり、帝冠様式を忽然として鬼っ子が出現したのではない。洋風建築に瓦屋根が横につくか上につくかの違いでしかない。満州に建設された興亜様式も同じ流れに組み込んでよいだろう。勿論、その基本は大きく中国文化圏域に包含されている。だからこそ、日本趣味やそれに代わる、東洋趣味との表現をしている。佐野利器は明治43年の討論会でも、この辺について論じている。

筆者は中国の友人、留学生にこれら帝冠様式、興亜様式の建築について感想を求めてきた。そして誰もがまったく違和感がないとの返事が返ってきた。ちなみに旧満州の日本人が設計建築したものを、よほど老朽化が進んでいなければ立派に今日でも中国の人々は使用している。しかし神社系のものは大概破壊している。

現に北京をドライブすれば、帝冠様式の類は嫌というほど目にすることができる。なかには高層ビルに中国風屋根が乗っているものまである。長春（旧新京）でも、戦後中国人が建設した帝冠様式調のものと日本の帝冠様式があまりに似ており、見間違えてしまっても不思議ではないくらいである。日本人観光客がよく利用する台北の圓山大飯店（グランドホテル）にしても、巨大な帝冠様式と見ることができる。ファシズム建築どころか、中国様式建築といってよいくらいのものだ。

唐破風にしても、確かに中国に同じものを見つけるのは困難かもしれないが、その名前自体中国文化を暗示させているし、中国様式のバリエーションと考えてよいのではないか。

これら帝冠スタイル（？）の中国建築の事例を次ページに示すが、ほんの一例である。

図 5－1 0 中国長春市の建築



図 5－1 1 同じく長春の中学校



図 5－1 2 台北市内の圓山大飯店（世界五大ホテルの一つ、1973年建設）



(2) 興亜様式・旧満州の官衙建築

現在の中国で、支那や満州という言葉は禁句である。勿論第二次大戦における日本の大陸侵略に対する中国側の自然な反発感情に依拠している。特に満州は偽満（ウェイマン）と呼び日本の傀儡国家であったことを明確にしている。そうした現実を踏まえながら、敢えて文意を分かりやすくするため戦前の事象については当時の名称を使用する。なお「満州」という言葉も戦前は「満洲」という漢字を充てていたが、今日では普通に前者が使用されているので、本稿ではそれに倣うこととした。

満州とは遼寧省、吉林省、黒龍江省（東三省と呼ぶ）の総称で、元来は民族名であった。日本がこの地方に進出を開始したのは朝鮮半島の支配権を争った日清戦争からだ。この勝利により台湾と遼東半島を割譲せしめた。しかし遼東半島はロシア、フランス、ドイツの嚴重な抗議（いわゆる三国干渉）により返還を余儀なくされる。ロシアは伝統的に不凍港ほしから南下策をとっており、義和団の乱鎮圧を名目に満州に兵を出し、実質満州全域を支配下においた。朝鮮半島支配に危機感と三国干渉以来の高まる反口感情は日露戦争を惹起した。この戦争で一応の勝利を得た日本はポーツマス条約で遼東半島（ロシアは関東州と呼んでおり、日本もこれにならいう呼ぶようになる）とロシアが建設した東清鉄道の内旅順・大連～長春間等を手に入れた。明治38年に関東総督府が設置され関東軍の前身である駐劄師団一万が総督の指揮下に置かれる。明治39年に関東総督府は関東都督府となり、鉄道警備の独立守備隊が新設された。この年の6月7日「南満洲鉄道株式会社設立の件」が勅令として公布され、11月26日に設立総会が開催され、初代総裁に後藤新平が就任した。これで日本が中国大陆に本格的に乗り込む体制が整った。

かくして大連、旅順、そして鉄道付属地となっていた奉天や長春などの日本による都市開発が進んだ。関東都督府には土木課があり建築技師も配属された。東京高等工業の教授となる前田松韻、松室重光が初期に活躍した建築家である。前田は大連民政署を、松室は和洋折衷スタイルの大連市役所や関東通信局など多くの公共建築を設計している。

何と言っても質・量ともに最大の建築活動を行ったのは満鉄の営繕組織であった。明治40年に大連本社の総務部に土木課の中に建築係が設置されたのが最初である。満鉄の建築営繕部門を取り仕切ったのは、小野木孝治（明治32年東大建築卒）である。小野木はそれまで台湾総督府で後藤新平の部下として仕事をしており、その能力を知る後藤に引き抜かれたらしい。満鉄は単なる鉄道会社ではなく、付属地の行政、病院・ホテルの経営、大連港の管理運営、高等教育、住宅の供給、撫順炭坑・鞍山製鉄所の経営など極めて広範囲に渡るものだった。従って国内よりははるかに大規模建築に携わるチャンスが多かった。

給与も内地の倍はあるとの魅力もあったが、治安の悪さや冬季の寒さ、資材調達の困難さ、交通手段が船しかないというハンデを乗り越える必要が存在していた。小尾嘉郎も満鉄就職を誘われていたが実際に踏み切れなかったことは第3章で述べたとおりである。

小野木は満鉄建築の帝王と呼ばれるほどの力を持っていた。彼の他に、大連大和ホテルを設計した太田毅、横井兼介、青木菊治郎、安井武雄、小野武雄らが活躍した。彼らが設計した建築は大連などに数多く残されている。なおこの節の旧満州に関する情報は西澤泰彦名古屋大学助教授の著作³¹⁾を参照させていただいている。

昭和6年9月18日に満州事変が勃発する。関東軍の暴走であるが、最早日本のシビリ

アンコントロールはきかなくなっていた。そして翌昭和7年3月1日、東北行政委員会（形式的に中国人によって成立させる目的から、関東軍が軍閥である黒龍江省の張景恵、吉林省の熙洽、遼寧省の臧式毅、黒龍江省の馬占山によって組織させ張景恵が委員長となった）は満州国の成立を宣言することとなる。その建前は日本、漢、満、蒙古、朝鮮の五民族による「五族協和」と「王道樂土」の建設であった。ラストエンペラーの溥儀が執政として建前上の国家元首となる。首都は長春とし名前も新京と変え、立法院、國務院、法院、監察院の三権分立スタイルをとったが、立法院は一度も開催されなかった。國務院には民政、外交、軍政、財政、実業、交通、司法、文教の八つ（八大部）が置かれ、その長は形式的に満州の実力者が就任したが、実権は日本人の次長がにぎっていた。

年号を大同とし、国家の体裁を整えるためそれぞれの国家機関の庁舎建設が始まった。満州国は国都建設局を設置し、軍部は佐野利器をその顧問として招聘した。初期段階では満鉄の建築技師（相賀謙介や青木菊治郎が呼ばれたことはすでに一章でふれたとおり）が横滑りで採用されていた。しかし佐野利器が招聘されると徐々にその弟子達が国都建設局の実権をにぎることになる。そして新京に建設された公共建築群が後に興亜様式と呼ばれることになる。

ところで新京の官衙建築に戦後「興亜」という名称を冠したのはやはり藏田周忠の「近代建築史」が最初ではないだろうか。このなかで藏田は「興亜調」の建築として、名古屋市役所、軍人会館、神奈川県庁をまず挙げ、続いて新京の忠霊塔、國務総理官邸、國務院庁舎、大同学院、満州国第八庁舎、新京法院合同庁舎を列举して、「下田菊太郎の言う帝冠式が遂に実現されたかの感がある」と述べている。³²⁾ 藏田の分類は今日の建築史家が帝冠様式が満州にのびて興亜様式を形作ったという論調や、帝冠様式と興亜様式は分離して論じるべき（西澤泰彦氏）と異なり、これらは同工異曲のものとして一括りにしているが、筆者も同意見である。

また昭和52年に刊行された「世界の都市と建築事情（アジアアフリカ編）」の中に、近江栄氏が大連と瀋陽を視察旅行したルポルタージュ風のエッセイが載っている。³³⁾ 近江はその印象を「ルネサンスとゴシックの模倣が主流 和洋折衷は5、6点しかなかった。不況と過当競争下であえいだ島国日本を見限った熱血漢たちの仕事であろう。満州開発40年史の設計者は日本では見あたらない作家達であるが、殆どの建築が原型をとどめており今後の調査で近代建築史の欠落部分を埋めることができるだろう。」と語っている。

今日でこそ長春や旅順は観光地として開放されているが、そうなったのはそれほど昔のことではない。中国の改革開放政策により、また日本蛮行の跡としてこれら日本人による建築群は文物保護単位という組織が愛国教育の対象として、また日本人観光客のための観光資源としてその多くが保全されている。筆者は平成14年に長春を訪問することができたが、昭和52年段階で近江氏は大連と瀋陽の2都市のみの訪問が許され、肝心の長春の官衙建築群を見学することができなかった。

現在、旧満州国の主要国家機関の内、現存する8つを偽満州国八大部と呼んでいる。これらはほとんどが官庁用街路として整備した順天大街（現在は新民大街）に面するか、その周辺に建設されている。

- ① 満州国軍事部（治安部） 昭和10年完成 鉄筋コンクリート造4階建、戦後一層増築されている。新民大街の北端部で国务院と向かい合っている。

図5-13 満州国軍事部



出典 絵葉書

図5-14 現在の旧満州国軍事部



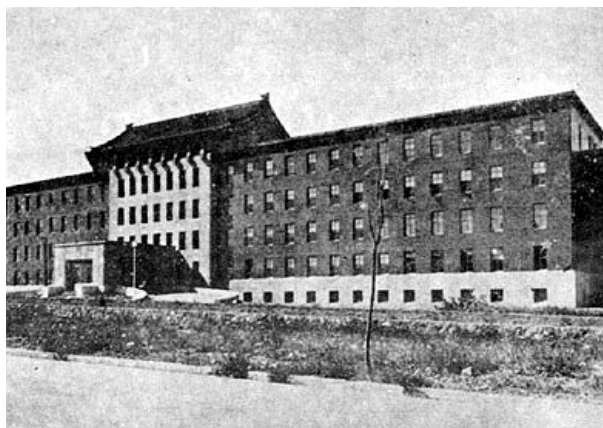
- ② 満州国司法部 昭和10年完成、相賀兼介設計

図5-15 満州国司法部



出典絵葉書

- ③ 満州国經濟部 昭和10年完成、鉄筋コンクリート造5階建
図5-16 満州国經濟部



出典 絵葉書

図5-17 現在の元經濟部 白求恩医科大学第三臨床学院



- ④ 満州国交通部 現在は白求恩医科大学予防医学院 昭和10年完成 鉄筋コンクリート造4階建

図5-18 満州国交通部



出典 絵葉書

- ⑤ 満州国興農部 現在は東北師範大学附属中学 昭和12年完成 現存せず。

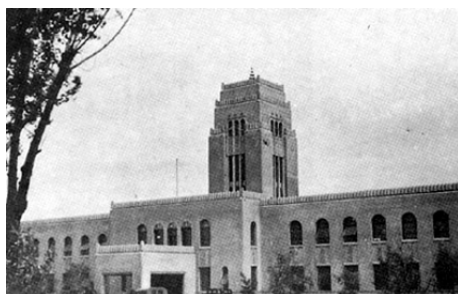
図5-19 満州国興農部



出典 絵葉書

- ⑥ 満州国文教部 現在は東北師範大学附属小学校（改築されて昔の面影はない）

図5-20 満州国文教部



出典 絵葉書

- ⑦ 満州国民生部 現在は吉林省石油化工設計研究室 昭和9年完成 満州国総務庁需要
処設計 鉄筋コンクリート造地上2F地下1F 清水組施工 人民大路

図5-21 満州国民生部



出典 絵葉書

図 5 - 2 2 現在の旧民生部 中央のペディメントは無くなっている



⑧ 満州国外交部 昭和 7 年建設とされている。煉瓦造 2 F

図 5 - 2 3 満州国外交部



出典 絵葉書

以上が八大部であるが、すでに戦前からそのデザインについては内地の建築家達から批判されていた。それはそれまでの帝冠様式(国粹主義建築)批判と趣が若干異なっていた。当然ながらモダニズム信奉の建築家達からであり、土浦亀城は特に経済部辺りの庁舎を醜悪であると決めつけている。³⁴⁾ また同様に日本工作文化連盟が同じ頃大陸建築座談会を開催しているが、この中で山田守の次の発言は大陸建築家蔑視の気分に満ち満ちている。

要約すると「今のところ大陸の方に立派な建築家は余りいません。内地で一万円位のものをやるクラスのアーキテクトが五十万円のものをやるという風に、階級がずっと落ちているではないですか。」この座談会には、岸田日出刀、坂倉準三、堀口捨己、山田守、市浦健が参加しており、山田の発言に同調する発言をしている。³⁵⁾

こうした批判に在満建築家が怒りを示したのは当然であった。満州における建築行為の厳しさは冬の寒さばかりではない。抗日ゲリラの襲撃、盗難は日常茶飯事であった。資材調達、熟達した職人の確保などその苦労は内地の比ではなかった。まさに命がけの仕事をたまに視察にきて、いい加減な評価をされてはたまったものではないというのが本音だっ

たろう。昭和15年3月に満州建築協会が「満州の住生活座談会」を開き、³⁶⁾ こうした本音を桑原栄治や室井修、秀島乾がぶつけている。

満州国の場合は「五族協和」を建前とする以上、その官衙建築も満州様式ともいえるべき新たなデザインが求められた。そして結局国家として何の伝統もない現実の中では、かつて満州民族がうち立てた清王朝のスタイルと西洋風と日本風がミックスした折衷様式を生み出したのである。それが興亜様式である。そしてこの様式についても、越沢明は佐野利器の影響によるものとしている。³⁷⁾ だがそれは関東軍がそうしたスタイルを強制したものではなかった。短い時間の中で満州国国都建設局の建築家は、北京や奉天の故旧の屋根や瓦を研究し、創案したものであった。従って中国人の目から見て、違和感のないものであり、むしろその景観を守ろうとさえしている。戦後この官衙建築の周辺に、中国は同様のスタイルの公共建築を建てており、興亜様式建築と見誤ってしまう位である。

満州国国務院

興亜様式の典型 昭和11年完成 設計満州国需品局 石井達郎

施工 大林組 石井は佐野利器の弟子（昭和18年に帰国後日本医療団に勤務、戦後は鹿島建設の取締役建築部長）、何となく国会議事堂に似ている。現在は白求恩医科大学となっているが、主要内部は往時のまま保全し、一般公開している。中央オーダーの手前屋上は皇帝溥儀の閱兵台で、手前の松は溥儀のお手植えという。

図5-24 満州国国務院



図 5－2 5 國務院内部

鄭孝胥や張景恵が執務した國務院総裁質である。正面に執務机が見える。



なお「白求恩」とは抗日戦争時代に華北方面で中国革命軍を支援したカナダ人医師ベチューンのことで、昭和13年に紅軍とともに行動中伝染病で死亡している。

この國務院庁舎だけは、先述した土浦亀城も仲々良いところがあると評価している。以下興亜様式に分類される建築を見てみよう。

図 5－2 6 満州国合同法院

昭和13年完成 鉄骨鉄筋コンクリート造三階建 満州国営繕需品局・牧野正己設計
高岡組施工 現在は軍病院 新民大街



若い時に、あれほど帝冠様式を罵倒した牧野正己が興亜様式をデザインしたというのは皮肉であるが、越沢明氏に「これは自分が設計した」と直接語っている。

図5-27 関東軍本部

昭和9年完成、関東軍経理部設計 施工 大林組 現在は吉林省共産党委員会で撮影は禁止されている。しかしこれは城郭そのものといってよいデザインである。



出典 関東軍司令部庁舎新築記念³⁸⁾

図5-28 皇帝溥儀の仮宮殿

昭和13年末に完成 映画ラストエンペラーでも使用された。溥儀はこの仮宮殿を嫌って、隣接する勤民楼（執務所）と緝熙楼（住居）から出たがらなかったという。レンガ色の瓦は美しい。現在は博物館に転用されている。



図5－29 満州中央銀行（興亜様式には属さないが、日本が満州に建設した最大規模の建築）昭和13年完成 鉄骨鉄筋コンクリート造4階建 西村好時設計 施工 大林組



出典 満州建築雑誌

この工事主任が桑原栄治で、足かけ5年かかっている。新京都市計画の中心となった大同広場（現在の人民広場）に面している。桑原は座談会で爆弾が落ちても屋根は壊れないと豪語している。³⁹⁾ 現在は中国人民銀行となっている。

図5－30 現在の旧満州中央銀行



澤地久枝氏は「もう一つの満州」という著作の中で、東北人民革命第一軍総司令官の「楊靖宇」について紹介している。抗日ゲリラを仕掛け、散々日本軍を苦しめたが、昭和15年ついに山中で射殺された。楊靖宇は首をはねられ、一時期その首はこの満州中央銀行内に保管されていた。

(3) 満州都市計画の評価

こうした壮大な建築群は、きっちりとした都市計画とセットで建設された。日本人が白紙の状態からこれほど大規模な近代都市計画をうち立て実行した例は皮肉にも侵略した異国の地でしか見ることはできない。これらを今日負の遺産と捕らえる考えと、あたかもNHK番組のプロジェクトXのように、肯定的に考える二つの立場がある。

これまで満州の都市計画と官衙建築群は、戦争責任論と不可分の関係にあるため戦後しばらくは誰も言及せず調査研究の対象としてこなかった。既述したように長春は昭和50年代まで開放されておらず、自由に見学などできなかった事情もあった。

こうした壁を最初に突き破ったのが越沢明氏の「満州国の首都計画」などの著作であり、さらにそれを追いかけるように西澤泰彦氏が克明な満州研究を建築史家の立場からしている。越沢氏は技術史的に淡々と記述し、どちらかと言えば肯定的スタンスに立っているように感じる。事実越沢氏の労作に対して、沈黙していた当時の土木・建築家は快く協力しているように見られ、その後越沢氏には都市計画学会賞と土木学会賞が与えられる。

これに対して西澤氏はこの都市計画が満州国という傀儡国家を飾ることに成功しているが、新京という都市を飾ることになっていないと指摘する。そして大同広場（現在の人民広場）をはじめ巨大スケールの建築はヒューマンスケールでなされていないと批判的立場を明確にしている。⁴⁰⁾ なお西澤氏も日本建築学会東海賞と建築史学会賞を受賞している。

また「20世紀大日本帝国」の中で、遼寧社会科学院歴史研究所の張志強副研究所長は、「満鉄が残したものは中国人に苦しい歴史を思い起こさせる。日本式の都市計画は東北地方の発展を邪魔している。」と語っている。⁴¹⁾ ただ具体的に何がどう邪魔なのかは分からない。

今日実際に長春を訪問してみるとどうであろうか。円形で周囲一キロの人民広場（ロータリー）は多くの市民の憩いの場となっており、巨大すぎる印象はない。むしろ順天大街（新民大街）の八大部の辺りは、確かに巨大である。地図ではこれら建築群は隣接しており、徒歩で散策しながらみることができるようを感じるが、実際にはとても無理である。これらはほとんどが紅軍と行動を共にしたカナダ人医師ベチューンの名前を冠した病院関係施設として転用されており、一定の静謐な環境が保たれており再利用に成功しているようである。それは新京に限らず、瀋陽や大連、ハルピンにおいても残された建築群は上手に利用されている。

満州国が昭和7年に成立し、すぐに佐野利器が国都建設局の顧問、新京都市計画の参与になっている。すでに見てきたように、日本国内の県庁舎帝冠様式がいわば佐野利器様式と言っても言い過ぎではないが、満州官衙建築も佐野をトップにした建築家達の作品である。

佐野は回想記のなかで、顧問就任以降毎年一回は満州に行っており、昭和12年と13年には学徒至誠会（陸軍が組織した学生に満州を見学させる会）の団長として訪中している。特に13年の訪問の帰りに司令部で「こんな古い、しかも広い、人の多い国は、とても占領し通せるとは思えない、どうして占領しなければいけないのか判らない」と発言し、山下奉文参謀長がいやな顔をしたと語っている。昭和14年には陸軍囑託として陸軍の工事現場を視察し、建築技術者が軍の下っ端の技手や軍曹の下におかれ、人間扱いされてい

ない状況下で彼ら建築技術者をなぐさめたという。

中国東北地方を旅行すると「不忘九・一八」との文字が彫り込まれた碑が時折目に留まる。9月18日と言われても、今日の日本人には何のことか分からないだろう。勿論昭和6年の満州事変勃発の日のことである。日本の通史で、日中戦争は昭和12年7月の蘆溝橋事件をもって始まりとしていることが多い。しかし中国側は満州事変をもって中日15年戦争の開始としている。

今日、すでに中国はその主要都市の大半を開放し、日本人観光客がどこにでも見られるようになっている。平和時でのそれら姿には本当に戦争があったのだろうかと思わせるものがある。しかも1970年に鄧小平により始まった改革・開放経済は成功を収め、毎年の高度成長を達成し、2001年12月にはWTO加盟も果たした。この中国経済のアキレス腱が国有企業の存在である。特に遼寧省には戦後日本が残した鞍山の製鉄所などの工場がそのまま中国に引き継がれ、国営企業として中国の計画経済を支えてきた。しかしこれら企業は技術革新に遅れをとり、膨大な赤字企業と化してその抜本改革が近年の中国経済における喫緊の課題となっている。そして皮肉にも、かつての日本の侵略企業と合併化を図り、技術協力を進めている。しかし時の流れが、すべてを恩讐のかたにしようとしていると考えるのは早計である。

少し足を郊外に伸ばせば、日本のおぞましい残虐行為の跡は歴然と残されているし、中国は青少年の愛国教育の場としている。ちなみに満州事変勃発の地たる瀋陽市柳条湖には記念館が建設されており、そこに次のような碑文が刻まれている。

1931年9月18日 中国人民が国辱という言葉をも永遠に記憶し、血涙をもって胸に刻み込んだ日である。日本の侵略者が凶暴な意図を持って「9・18」事変を生起させた日である。この日から14年間に亘って、日本の侵略者は中国で枚挙にいとまがない程の罪悪を犯し重ねた。数千万人もの中国人民に塗炭の苦しみを与え、無数の人的、物的財産を掠奪し、中華民族の尊厳を随意に蹂躪し続けた。この日から14の星霜を通じて、日本の侵略者に抵抗する中国人民の炎は、全国各地に燃え広がり、多数の愛国人民は抗日戦線に尊い生命を奉げた。1931年9月18日は、中華民族の国辱の日である。

図5-31 九・一八事変陳列館



満州事変の記念館、左に倒れているモニュメントは日本軍が当時建てた戦捷記念碑

第6節 この章の最後に

帝冠様式に関する筆者の結論はファシズムと直接的な関係はないということでは井上章一氏と同じであるが、ただ日本人の瓦屋根に対するシンパシーが自然に生み出したとまでは言い切れない。確かに小尾嘉郎は神奈川県庁舎を自然な感性でデザインした。それを現実に建築させ、そのエピソードを生み出したのは佐野利器や伊東忠太らの指導者である。特に、佐野という建築家の持って生まれた時代の空気を鋭敏に感じ取る感性がなければ出現していないはずだ。そして日本趣味論争は中国文化圏という傘の下での争いにすぎなかった。元々それは様式とまで呼べるしろものではあったかには疑問が残る。既述のように、戦後進歩派建築評論家の強引な非難すべき対象の格上げであったということだろう。

さらに言うなら、建築自体にファッションも Kommunismus もない。それが文学や絵画のように直接的にそのイデオロギ―を表現するものでないからだ。一部の軍歌を除けば音楽もどちらかと言えば建築に近い。ヒトラーはワグナーの曲を好んだ。だからといってワグナーをファシストと呼ぶ者はいないだろう。それは使う側の人間の問題なのだ。

しかし、ただだからと言って建築家の戦争責任がすべて免罪されるわけではない。要はどれほど主体的に戦争に関与したかである。七三一部隊の施設は誰が設計したかは分らないが、必ず建築家が介在したはずである。

昭和14年に佐野利器は陸軍の囑託になっている。彼は各地の建築技師を励ましたと自ら語っている。愛息を南方で失っている佐野は、戦時下で合理的な判断に基づき身を処したものと信じた。満州国というあだ花は、結局膨大な日本・中国両国民の犠牲を支払わせることになった。

・装飾ということ

帝冠様式を嫌ったモダニストの審美観に装飾の問題がある。フランク・ロイド・ライトとワルター・グロピウス、ル・コルビジエ、そしてミース・ファンデル・ローエを近代建築の四大巨匠と呼んでいる。そのミースの有名な言葉に「**less is more**」(より少ないものほどより豊かだ)があるが、モダニストの装飾排除の基本理念となっているものだ。オーストリアの建築家アドルフ・ロース(1870~1933)は「装飾は犯罪」とまで言い切っていた。

ミース(1886~1969、ドイツのアーヘン出身)は鉄とガラスを素材に装飾性を排除した純粋空間を追い求めた。この考えは装飾で身をまとった古典主義建築に対して実に新鮮だったに違いない。屋根をフラットルーフにして、直方体のビルが都市を占有する。コンクリートは打ちっ放しがはやる。そして今日、それらモダン建築も年月の経過とともに、老朽化と陳腐化がはじまった。特に海岸近くのコンクリート打ちっ放しは塩害による中性化の進行と表面の風化は見るも無惨である。

横浜は古典様式建築の宝庫でもある。日曜画家はこぞって塔のある建築に群がる。横浜開港記念会館や神奈川県庁の塔が人気のもとだ。昭和41年に完成した坂倉準三による県新庁舎は誰も描こうとはしない。ちなみに静岡県庁も、帝冠様式の本館に隣接して高層の

新館が建設されており、本館の写真を撮ろうにも適当なアングルさえ見つからない。愛知県庁舎と名古屋市役所は幸いに創建時のまま、名古屋の都市景観を保っている。

装飾は排除さるべきものではないのだ。塔も装飾の一部と考えて良いだろう。装飾の排除は美学上の考えはそれとして、産業社会の進展、即ち資本主義のキーワードたる「効率性」ということと堅く結ばれていると筆者は考えている。くだけて言えば「早く」「安く」「大量に」という産業社会精神の反映である。

2002年の9月11日、ニューヨークのワールド・トレード・センタービルがテロリストにより破壊された。ミノル・ヤマサキの設計によるものだが、ミースの理念の集大成とも言うべき建築であった。アメリカ資本主義のシンボルであり、誤解を恐れずに言えばテロの対象として相応しいものであった。そしてなによりも驚いたのはそのあっけない崩壊の様子である。究極の「効率」は何ともろいものか。

装飾は人間が人間としての文化を築いてきた根元的一部であったことを忘れてはならない。それは言語をもったことや火を使うことと同列なものである。装飾をしない民族はこの世に存在しない。民族は生存環境や宗教観から固有の装飾を生み出してきた。建築に装飾することは悪趣味と言われようが、自然な人間の営みなのだ。

かつて筆者自身の経験で思い出深いことがある。昭和40年代の後半から50年代にかけて、神奈川県は「高校百校建設計画」を推進していた。ベビー・ブーマーや高校進学率の増大に対しての対応策である。その計画当初はまさにこの効率のために、学校は標準モジュールを定め、また学校格差を作ってはいけないとの要請から、まったく同じデザインの学校建築を作り出していた。

しかるに昭和53年頃から、逆に学校教育の個性化が叫ばれ始め、建設費の1パーセントを個性的な学校とするために使って良いことになった。長洲知事のお声掛けで始められた「文化のための1パーセントシステム」と呼ばれるもので、神奈川県のみならず日本各地で採用された。元々はフランスやアメリカで行われていたものの導入である。

その効果は明らかであった。設計者は当初とまどったものの、時計台や外壁彫刻、サンクガーデンと知恵を絞ってアイディアを競った。装飾することの喜びに、公務員建築技師は充実感を味わったものだ。無論その出来映えには格差が生じたのはやむを得ない。こうした動きは公営住宅や橋梁などの土木構築物にも波及した。公営住宅には傾斜屋根が復活し、橋の欄干にも何らかの装飾がつけられた。時代のキーワードは「潤いと安らぎ」となっていた。

1970年代ころからモダニズムに対してポストモダニズムが言われ出した。大衆が持つ記号化された建築意匠（例えば西欧ではペディメントと呼ばれる切り妻破風を入り口にすることなど）はむしろ肯定的に使うべきであるとの主張がなされた。そして装飾と傾斜屋根の復権である。ポストモダニズムも筆者は経済社会との密接な関係を見る。それは社会の成熟化と言われるもので、時代のキーワードは「ニーズの多様化」となり「個性化」であった。画一的なものの大量生産・大量消費から、少量多品種の生産へと変化する背景に建築も呼応していたのである。ハウジングセンターはその具体的事例を見ることができる場所だ。

2002年8月3日、ポストモダンの建築家・内井昭蔵がこの世を去った。彼の言わば

遺稿に当たるのが、「装飾の復権・空間に人間性を」との著作である。筆者は次の内井の言葉（筆者要約）でもって、⁴²⁾ 本章をとじることとしたい。

「人間」を取り戻すことは、「装飾」をそこに復権することだ。人間性をいかに回復するかを建築でできるのは「装飾」だ。構造と装飾がバランスよく存在する。これこそ健康な生活環境とか健康な建築のもとではないかと思うのだ。「装飾」は例えて言うならば、感性、好みと言ったようなわけのわからないものだと思う。そのようなものが人間性を象徴する。

そのようなものを建築から全部排除していったのは間違いだったのではないだろうか。

第5章 註

- 1) 林青梧：文明開花の光と闇、相模書房、昭和56年3月
- 2) 西山卯三：建築史ノート、相模書房、昭和23年8月
- 3) 西山卯三：現代の建築、岩波新書、昭和31年1月、**P152～157**
- 4) 伊東忠太：伊東忠太建築文献第6巻、龍吟社、昭和12年1月、**P96～101**
- 5) ブルーノ・タウト：日本文化私観、森鴎郎訳、明治書房、昭和11年10月、**P297**、ここで、タウトは「桂離宮を経て建築術へ、然らずんば、日光廟を経て俗悪品へ」と述べている。
- 6) 建築雑誌、昭和48年10月号、歴史的体験者からみた設計者のための制度
- 7) 近江栄：日本的独自性の模索・喪失・回復、新建築社、昭和52年
- 8) 藏田周忠：近代建築史、相模書房、昭和40年、**P232**
- 9) 神代雄一郎：新訂建築学体系第6巻・近代建築史、彰国社、昭和33年8月
- 10) 同書、**P273**
- 11) 同書、**P325**
- 12) 村松貞次郎：日本近代建築の歴史、日本放送出版協会、昭和52年10月
- 13) 「建築と社会」、昭和12年6月号
- 14) 公共建築、昭和51年1月号、**P84**
- 15) 長谷川堯：神殿か獄舎か、相模書房、昭和47年8月、**P105**
- 16) 村松貞次郎：日本建築家山脈、鹿島研究所出版会、1965年
- 17) 佐野利器：建築設計図案懸賞競技に就て、建築世界、大正12年4月号、**P3**
- 18) 井下清：佐野先生の想ひ出、佐野利器・佐野博士追想録、1957年11月、**P47～51**
- 19) 宮内康：帝冠様式、現代建築、新曜社、1993年5月、**P48**
- 20) 佐藤道信：“内外”“公私”のなかの「和」と「日本」、第24回住総研シンポジウム配布資料「和風の誕生—視覚化された日本」、主催（財）住宅総合研究財団、2004年7月9日於・建築会館、
- 21) フランク・ロイド・ライト：建築のために、濱徳太郎訳、国際建築、昭和6年2月号
- 22) 越沢明：満州国の首都計画、日本経済評論社、1988年12月、**P208**
- 23) 井上章一：戦時下日本の建築家、朝日選書、1995年7月
- 24) 石田潤一郎：都道府県庁舎—その建築史的考察、思文閣出版、平成5年2月、**P366**
- 25) 藤森照信：日本の近代建築・下、岩波新書、1993年11月、**P21～23**
- 26) 飯島洋一：王の身体都市、青土社、1996年5月、**P86**
- 27) 布野修司：キッチュ、現代建築、新曜社、1993年5月、**P30**
- 28) 布野修司：和風、現代建築、新曜社、1993年5月、**P57**
- 29) 西澤泰彦：満洲都市物語、河出書房、1996年8月、**P59**
- 30) 太田博太郎：唐破風に就いて、建築雑誌、昭和12年7月号
- 31) 西澤泰彦：「海を渡った日本人建築家」彰国社1996年12月、同：満鉄「満洲」の巨人、河出書房新社、2000年8月、

- 3 2) 藏田周忠：近代建築史、相模書房、1 9 6 5 年 3 月、**P232**
- 3 3) 近江栄：旧満州の日本人建築家の作品を訪ねて、世界の都市と建築事情（アジア
アフリカ編）、新建築社、1 9 8 1 年 6 月、**P10～13**
- 3 4) 満州建築座談会、満州建築雑誌、昭和 1 4 年 1 1 月号
- 3 5) 現代建築、昭和 1 5 年 1 月号
- 3 6) 満州建築雑誌、昭和 1 5 年 5 月号
- 3 7) 越沢明：満州国の首都計画、日本経済評論社、1 9 8 8 年 1 2 月、**P188**、
なお西澤泰彦氏は満洲官衙建築に佐野利器の影響力があつたことには疑問がある
と筆者に語っている。西澤泰彦：満州国の建築組織の沿革について、日本建築学
会計画系論文集第 4 6 2 号、1 9 9 4 年 8 月、**P192**,で別稿にて論じるとされて
いる。
- 3 8) 関東軍司令部庁舎新築記念、大林組、昭和 1 0 年 1 1 月
- 3 9) 満洲中央銀行総行本建築を語る座談会、満洲建築雑誌、昭和 1 0 年、1 1 号
- 4 0) 西澤泰彦：図説・満州都市物語、河出書房新社、1 9 9 6 年 8 月、**P115**
- 4 1) 2 0 世紀大日本帝国、読売新聞 2 0 世紀取材班編、中央公論新社、2 0 0 1 年 8
月、**P164**
- 4 2) 内井昭蔵：装飾の復権・空間に人間性を、彰国社、2 0 0 3 年 1 2 月、**P10～11**

